別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　安藤智子

安藤智子の博士学位請求論文、「芸術家アルフォンス・ルグロの静かな闘い − 19 世紀英仏芸術運動における「レアリスム」の行方」は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてフランスとイギリスを舞台に活躍したディジョン出身の画家アルフォンス・ルグロを多面的に再評価し、当時の美術運動の幅広い流れの中に位置づけた独創的な研究である。

マネ、ファンタン＝ラトゥール、ホイッスラーらと同世代の画家ルグロに関しては先行研究が少ないが、それはルグロの持つ魅力と重要性にもかかわらず、作品の理解と歴史的位置づけが困難なためであり、早い時期にフランスからイギリスに移住したこともまた一貫した画家イメージを曖昧にしている。著者は、折衷的な宗教風俗画家という従来の見方を脇に置き、二つの視点から新しいルグロ像を構築しようと試みた。ひとつは、1860 年代フランスの革新的なレアリスム絵画から出発したルグロが、渡英後も自然主義や象徴主義の潮流と並走しながら、地方の宗教風俗を中心とする主題を独自の視点から絵画化したことを明確にすること。もうひとつは、英仏の芸術家やその支援者たちのサークルとルグロとの関係を掘り起こし、画家の知られざる活動を浮き彫りにすることである。このような課題に取り組むために、著者は英仏両国で可能な限りルグロ作品を調査し、書簡や同時代批評などの原資料を博捜した。その結果、ルグロに関する新資料を発見し、地方主義や共和主義の思想に基づく斬新な作品解釈を提示し、美術交流の精力的な仲介者という側面をも解明したのである。美術史のはざまに半ば埋もれていたルグロの多彩な顔を浮かび上がらせることに成功したこの論文は、ルグロという画家の正当な再評価に寄与するのみならず、19 世紀の英仏美術史に対しても新たな見方を付け加えたと言えよう。

本論文は「本文」と「付帯資料」から成る。本文は３部構成で全８章、および序論、結論、参考文献一覧が加わる。別冊には図版リストと図版、ルグロの作品展示状況一覧、人名一覧、およびルグロの未公開書簡 26 通（手稿からの書き起こし）が掲載されている。以下、論文の構成に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序論において、ルグロ研究の現状を踏まえた上でその再検証を行う本論文の意義と構成を述べた後に、第１部では「パリ時代のルグロ」が論じられる。第 1 章は人物交流を軸にルグロの生涯を包括的に述べ、パリ時代におけるルコック・ド・ボワボードランのアトリエにおける教えと他の芸術家たちとの交友関係を、ルグロ芸術の起点として位置づけている。第２章は初期の代表作《エクス・ヴォト》(1861 年) に関する研究で、当時の批評を精査し、クールベの《オルナンの埋葬》と比較検討しながら、ルグロにおける「素朴さ」の美学の源泉がプリミティヴな初期フランドル絵画にあることを新たに主張する。《マネの肖像》(1863 年) をめぐる第３章では、「落選者のサロン」前後に形成されたマネを囲む革新派芸術家集団に属するルグロの立ち位置を明確にしながら、画中画を含み込む作品の造形的特質を分析している。

第２部「渡英後のルグロ」では、未だ本格的に研究されていないイギリス移住後の作品を詳細に検討する。第４章はルグロには珍しい裸婦像《キューピッドとプシュケ》（1867 年）を取り上げ、ヴェネツィア絵画に触発されつつも現実的なヌードを描いた点に、マネとも比較し得るレアリスム絵画としての試みを洞察している。フランス北岸の民衆信仰儀式を表す《海の祝別式》（1873 年）を論じた第５章は力作で、本論文全体の前半から後半への橋渡しにもなっている。画面の中心モティーフである母子像に注目した著者は、ルグロの旧友でパリ・コミューン後にロンドンに亡命した彫刻家ダルーの母子像との共通性を地方主義への傾斜と共和主義の政治信条に見て取り、画家は普仏戦争と内戦で疲弊した祖国フランスの再生への願いを本作に込めたと解釈するのである。続く第６章では、イギリスの政治家チャールズ・ディルクがルグロに注文した《ガンベッタの肖像》（1875 年）を調査し、英国共和主義者のサークルとルグロとの関係を明らかにすることで、第３部へのつなぎとしている。

第３部「仲介者としてのルグロ」は本論文で最大の成果をもたらした部分である。ルグロはロンドンのスレード・スクール教授としてデッサンを重視する美術教育を行う優れた教育者でもあったが、第７章でその問題を扱った著者はさらにルグロの絵画の本質論にまで踏み込み、レアリスムとイデアリスムの融合という特質を適確に抽出している。そして本論の掉尾を成す第８章は圧巻の内容である。ロンドンの美術愛好家コンスタンティン・アイオニディスと知り合ったルグロが、そのフランス近代絵画コレクションの形成にアドヴァイザーとして深く関わったこと、また彫刻家ロダンの作品をイギリスに広めることにも尽力したことが、未公開の貴重な書簡や写真資料を基に具体的に示される。その背景には、フランス人芸術家の相互扶助的な意識や民衆への教育普及を目指す共和主義思想があり、ルグロがイギリスへのフランス近代美術導入という点で、最適の仲介者として熱心に活動したことが説得的に論述されている。最後に著者はこのようなルグロの活動全体を、同時代の芸術動向に敏感に反応する革新派レアリスムの画家が、英仏の共和主義者人脈を通じて、作品制作においても教育普及活動においても「静かな闘い」を繰り広げたのだと結論づけるのである。

以上のように、本論文は多角的な光を当てることによって新しいルグロ像の構築に成功しており、その画期的な功績を高く評価する点で審査委員全員の意見は一致した。新資料の発掘、斬新な作品解釈、知られざる側面の提示などは、本論文の重要な成果と認められた。このほか審査委員からは問題点の指摘がいくつかあった。宗教主題の重要作品で論じていないものがあること、同時代の画家たちとの比較が十分ではないこと、ルグロの歴史的な位置づけに曖昧さが残ることなどであるが、これらはむしろ今後の研究課題と言うべきであろう。また引用資料における誤訳の指摘もあったが、致命的なものではなく、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものではないことが確認された。ただし、本論文を刊行する際には、他の修正点や誤字脱字と合わせて必ず修正すべきことも確認された。

以上の審査の後、審査委員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、安藤智子の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。